

talk! talk! talk! ミュージシャン・坂崎幸之助さん



ミュージシャン 坂崎幸之助さん

「小さい頃から一度のめり込むととことん突き進む性格だった」と語るミュージシャン・坂崎幸之助さん。1974年にTHE ALFEEのメンバーとしてプロデビューし、現在も日本のミュージックシーンのトップを走り続けている。

そして、音楽と同時期に始めたカメラも趣味の域を越えるほどに坂崎さんを夢中にしているようだ。その興味は撮るだけにとどまらず、古カメラのコレクターとしても腕を鳴らしている。そんな坂崎さんならではのカメラとの付き合い方についてたっぷりとお話を聞いた。

プロフィール

さかざき・こうのすけ。1954年、東京都生まれ。大学在学中に桜井賢、高見沢俊彦とロックバンドを結成し、1974年8月に「THE ALFEE」としてプロデビュー。デビュー以来、日本を代表するバンドとして安定した人気を誇っている。中学生から始めたというアコースティックギターは日本屈指の演奏技術を持ち、THE ALFEEのアコースティック・サウンドのキーマンとなっている。親しみある話術でラジオのパーソナリティーとしても人気になり、2002年には幻のフォークグループ「ザ・フォーク・クルセダーズ」の34年ぶりの再結成に参加し、話題になった。

また一方で、音楽以外にも様々なジャンルに造詣が深く、熱帯魚、両性爬虫類の飼育、和ガラスのコレクション、古カメラのコレクション&カメラマンとして趣味の範囲を越えて高く評価されている。著書には『フォクトレンダー・ストリート・スナップ2000』アルファベータ・共著、『吉田拓郎のワイパーへ行こう!』ワールドフォトプレス・撮影担当、『和ガラスに抱かれて』コロナ・ブックス、『ネコロジー』音楽専科社、『ニューヨークスナップ』アルファベータ、『坂崎幸之助のJ-POPスクール』岩波アクティブ新書、等がある。

ニコンのカメラは『プロの道具』 頑丈なところが一番の魅力

今日は、坂崎さんの数あるカメラの中からニコンFとS2をお持ちいただいています。

このS2は僕が生まれた1954年に発売されたものなんです。だからS2はずっと欲しいと思っていてようやく手に入れたものなんです。シャッターを何度も切りながらこの巻き上げの音はニコン独特の柔らかさがありますよね.....。

実はニコンのカメラを手にしたのは、ほんの10数年前なんです。カメラは小学生ぐらいから使っていたんですが、一眼レフカメラは大人になってから使うようになったんです。その頃はまだニコンは敷居が高くてね。ニコンを使うには心してかからないといけないという気持ちがありましたから、実際手にするまでには結構時間がかかったんです。

初めて手にしたニコンのカメラは何だったのですか？

親戚のおじさんからおさがりでもらったF2です。

実際にニコンのカメラを手にした時の感触はいかがでしたか？

F2もそうでしたが、それよりも初めてFを手にした時の方が「ああ、これがニコンだな」って感じましたね。デザインを持つ雰囲気や、この頑丈なところはいかにも「プロの道具」としての存在感がありますよね。なんだか.....このまま戦えそうですね。暴漢に襲われてもペンタプリズム部分で叩いたりしたら、かなり痛そう(笑)。

それぐらい頑丈だと。

そう、カメラなのに護身に使えるような.....。でも、そういう雰囲気を持つカメラって他にあまりないですよ。そこがFの魅力だと思います。きっとリアルタイムでFに出会った方は感動したと思いますよ。僕は後になって「やっぱりFはいいなあ」と思ったクチですけど、発売当時からFを使っていた方にとっては凄く思い入れの強い機種なのでしょうね。



古いカメラは思い通りに写らない 「優等生じゃないところがいいんです」

坂崎さんはカメラの収集をしていらっしゃるそうですね。

収集してますね。ニコンは、SとS2とSP、FはF3まで持っています。最近のものより、戦前から1960年代ぐらいまでのものがおもしろいですね。一番好きなのは1950年代、60年代かな。明治、大正あたりのものは古すぎてしまって実用的ではないんですよ。

実用的というのは大前提なんです。

もちろん。カメラは使うべきもので、鑑賞用ではないですからね。やっぱり写真を撮ることがカメラの面白さのひとつでしょ。撮るまでの苦労と面倒さ、それから現像に出ている間の期待と不安、最後に実際に写真を見て、どんな感じで撮れているのかという結果ね。古い機種やレンズにはそうとうでかい悪い子がいっぱいいますから、なかなか予測がつかないんですよ。でも、僕にとっては思い通りにいかないとこが面白いんですよ。いわゆる優等生じゃないところが。

そして予測がつかないからこそ現像を待つ時間も楽しいと。

そうです。今はデジタルカメラがありますからすぐに見ることができそうですが、でき上がりを待つ時間があるというのが本来の写真との付き合い方なのかなと思います。1時間以内ですぐできちゃう所も多いですが、以前は1日、2日かかってましたよね。その間にドキドキしながら待って.....まあ、でき上がったのを見てえらくがっかりすることも多々ありますよ。全部アンダーだったり、中には真っ黒だったりして「うわあ! こんなしか撮れてない」って。でも失敗は失敗でまた楽しいんですけどね。

『ボロボロだけどちゃんと動く』そういうカメラほど愛着が湧く

古いカメラには他にどのようなところに魅力を感じるのですか？

どんな人が使っていたのか、どんな経緯で自分のところにきたのか、そういうロマンを感じさせる所ですね。前は中古って苦手だったんです。ヴィンテージギターも同じで、前に使っていたミュージシャンの癖があったりとか、魂が入っているんじゃないかと



か、そういう感覚が嫌だったんです。でもギターもカメラも、ある時期からそれがロマンになりました。

どんな人が使っていたかというのは予測がつかないのでしょうか？

いや、ほとんどつきません。たとえば、このFはここまで使い込んでるんだからプロの人だろうとか、それぐらいです。あとね、このFの「Nikon」ってロゴは削ったか何かで消えているんです。それに変な所に穴が空いているからきつと改造したんでしょうね。これは相当怪しい人だと思いますよ（笑）。ジャーナリストか、報道陣か、戦争に行った人かもしれない。そうやって想像するのもまた楽しいですよ。

ボディのメッキの風合など、長年使っていないと出せない味わいがありますね。

そうですね。僕はきれいなものには全然魅力を感じないんです。ボロボロだけどちゃんと動いてというのが一番のポイントなんです。そういうヤツほど愛着がありますよ。「よくぞここで生き延びて僕の所に来たねえ」って。最初はシャッターの感じとか、前に使っていた人の癖が残っているからすごく違和感があるんです。それが使い慣れてくると自分のものとして不思議と馴染んでくるからさらに愛着が出てきます。

1台1台に愛着が湧くと、どのカメラを使っていいのか迷ってしまいませんか？

今日はどのカメラにしようかと考えた時に、誰かが使っていたとか、雑誌に載っていたとか、結構周りに影響されることが多いんですよ。だからそれほども迷いませんね。

でも、失敗のない、信頼のおけるカメラというのもあって、それを含めて何か選ぶことが多いです。最近ではNew FM2を使っています。一眼レフカメラの中では今一番使っているかな。1つはそういった確実なカメラ、もう1つはやんちゃだけど面白いヤツとか不良なヤツにしてみたりするんです。そういうヤツに限って案の定、大事な時に失敗したりするんですけど、それはそれでかわいいですよ（笑）。

自分がいる所から見たものを 持っているレンズで撮る

被写体については、何を撮ろうというふう決めてから撮影されるのですか？

何を撮ろうというわけではなく、基本的には見たまま、本能のままにシャッターを押しています。

被写体だけでなく、画角も、構図も僕はあまり考えないですよ。普通、ここだったら28mmで撮るだろうとか、85mmで撮るのかなとか考えてレンズを変えたりしますよね。でも僕はその時付いたレンズで撮っちゃう。だから、やたらと広い範囲が写っていたり余計な部分が入っていたり、逆にもっと広角で撮った方がいいんじゃないの？っていうのもあるみたいです。

“あるみたい”？

そう、“みたい”です。僕ね、本当にあまり気にしていないんですよ。普段人が目で物を見る時

「あ、この風景は広角で見よう」と意識しないですよ。僕の場合は写真もその延長で、ただ見えたままにシャッターを押しているだけなんです。寄ろうとか、離れて撮ろうとかあまり思いませんね。自分がいる所から見たものを、その場にあるレンズで撮ろうと思っています。

見たままにということは、どちらかと言ったら広角レンズで撮られることが多いのですか？

広角が多いですね。だから本当に目線に近い写真が多いです。それにフレーミングも考えないし、テーマもない。いわゆるコンテストに出したら、多分、まず最初に落とされるだろうという写真ですよ。テーマを決めると1本のフィルムを撮るのに相当の時間がかかってしまうと思うんです。おそらく考え込んでしまって、今日は1枚も撮れなかったってことになりそうです。それよりも撮ることそのものが好きなんです。ピントを合わせて、露出を合わせてっていう、シャッターを押すまでの動作が楽しいんです。

では、でき上がった写真についてもっとこうした方がよかったな、というようなことを考えたりはされないのですか？

でき上がった写真はただ「おお、撮れてる、撮れてる」って思うだけ。自分でも何を撮ったのかわからないような写真ばかりですから、人が見たら「何が言いたいんだ、この写真は！」って思うんですけど、いいんです。人に頼まれた写真じゃないから（笑）。でもそれがね、何年か経って見てみると、意味のない写真でもその頃の自分のことや生活環境、ここに行ったとか何を思ったとか、そういうことを思い出すんですよ。どんなに下手な写真でも、こうして写真としての1つの役割を果たしているんだなって.....この間、写真を整理していたらふとそんなことを思って。忘れた頃に見ると自分の写真って結構感動するものなんです。



写真はその人の目線そのもの「人に見せるのは恥ずかしいです」

今日は数枚写真をお持ちいただいています。

ええ、でも自分の写真を選ぶのは難しいですね。たとえば「自慢の1枚を持ってきて下さい」と言われると「これがお前の自信作か」ってなってしまうでしょ。本当にすごく難しいんです！

でも、坂崎さんご自身にとっての自信作というのはあるんですよね？

うーん.....テーマもなく撮っているから、自分ではもう何がよくて何を基準にどう選べばいいのかわからないんです。自分ではよくても、人に見せたときにこの写真では伝わらないかと思ってしまいますよね。人から「これは面白い写真だね」って言われて、そういう見方もできるんだと気づくことは多いです。それは偶然できた自信作ですね。でも、そもそも人に写真を見せるのって恥ずかしいことじゃないですか。

恥ずかしいというのは？

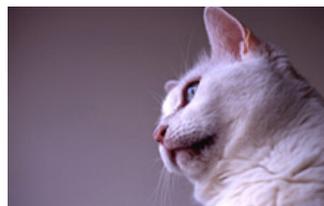
僕の目線をそのまま写しているということは、僕がいつもどういうふう周りに見ているかがバレちゃうってことなんです。女性の写真を撮れば一番分かりやすいですよ。坂崎さんは女性をこう見てるのかって思われるわけですよ。逆に、テーマを持って撮れば恥ずかしくないですよ。上手い、下手を評価されたりもしますが、1つの作品としてこうやって撮るという目標を持つわけだから、その人の目線の写真とは違うんです。僕のほとんどが恥ずかしい写真です。

（笑）その恥ずかしい写真をお持ちいただいたわけですが。

猫の写真とツアーの最中に撮った写真です。猫は被写体そのものがかわいいから、そっちに注目が行くんですよ。だから結構恥ずかしさから逃げられるんです。僕と猫との付き合い方みたいなものは見られちゃいますけどね。名前は「ななめ」と「ぎんちゃん」です。「ななめ」はもう里子に出してしまったんですが、顔をいつもななめにかしげてるから「ななめ」って付けたんです。「ぎんちゃん」はもうずっとうちにいる猫なんです。



こちらが「ななめ」。「室内動物写真家と名乗れば？」と言われるほど家にいる猫の写真を撮っているそうだ。



10年ほど同居しているという「ぎんちゃん」は坂崎さんの名モデル。「なかなかフォトジェニックなおっさんです（笑）」。

ツアー中の写真は、やっぱり恥ずかしいですね。ツアーでいろいろある所へ行ってはいるんですが、飛行機が新幹線で移動して現地に着くとすぐホテルですから、あんまりネタがないんですよ。あ、今日持ってきたのは自信作ではないですから（笑）。



ツアーの移動のために乗った飛行機から撮影した富士山。



こちらはツアー先の仙台で撮影。アルフィーのツアートラックが逆光のなかに浮かんでいる。

カメラは多くの人間の英知の塊

これからも欲しいカメラがどんどん増えていくのではないですか？

そうですね。僕の場合はこのカメラの兄弟にあたるやつが欲しいとか、同時代の他のメーカーのカメラが欲しいという欲望が出てくるんです。でも僕はまだいい方で、「シリアル番号が違う」とか言って同じレンズを10本集めている人もいますからね。家にあるのにお店に並んでいるのを見ると欲しくなっちゃうんですって。でも、その気持ちはわからなくもないんです。照明の下できれいに並べられているカメラを見てるとね、カメラが僕を呼ぶんです！

(笑) 「買って！」という声が聞こえる？



いや、買う時の言い訳ですよ(笑)。自分の欲望に負けているだけです。でも、FやSのシリーズだったら何台あってもいいと思いますよ。ファインダー部分が違うものを揃えてもいいですし、僕もFだけで3、4台持っています。ですがまったく同じ機種でも1台1台癖があるから、自分の持っているカメラとはやっぱり違うんです。そうやって細かく違いを見てしまうからどんどんハマって、どんどん物が増えちゃう。そして我が家はえらいことになっちゃうんです(笑)。

坂崎さんがどんどんハマってってしまうカメラとは、坂崎さんにとってどういう存在なのでしょう？

僕にとっては.....恋人でもなければお友達って感じでもない。いつもそばに置いておきたいとは思いますが.....僕にとって何かという意味はあまりないですね。カメラはカメラです。ただ、僕は今でこそ簡単にカメラを使っていますが、ここに至るまでカメラは凄く長い歴史を積み重ねてきているわけ

です。こんな小さなものですけど、人間のアイデア、才能、技術がたくさんつまっている。多くの人間の英知の塊なんだから、そう簡単にカメラについてどうこう語れるものではないですよね。開発に携わってきた人たちに怒られちゃいますよ。カメラはご立派、えらいです。

その思いがあるからこそ1台1台に、余計に愛着が湧くのでしょうか。

そう、だから使うときも簡単に使っちゃいけないんです。1台1台の癖にこっちが気を使って合わせながら、カメラを使わせていただくという感じですね。デジタルカメラも使っていますが、これからもこのスタンスで銀塩カメラを使い続けていきたいと思っています。

[> コンテンツトップへ戻る](#)

※掲載している情報は、コンテンツ公開当時のものです。

株式会社 **ニコン** 映像事業部

株式会社 **ニコン** イメージング ジャパン

© 2019 Nikon Corporation / Nikon Imaging Japan Inc.